

## 想像的抵抗の問題について —— 物語参与の観点から ——

岡田進之介

### はじめに

本稿は、分析美学におけるフィクションに関する理論研究の中で、興味深いものとして研究されてきた「想像的抵抗 imaginative resistance<sup>(1)</sup>」と呼ばれる現象について論じる。この現象を論じた初期の論者たちが、現象を文脈から切り離して議論を行っていたのに対して、現在では現象をジャンル等の文脈を考慮しつつ分析することが一般的になっている。しかしそれらの先行文献は、説明に用いる概念の不明確さや、説明の包括性の点で問題がある。本稿では、それらの先行文献を検討したのち、Gregory Currie（カリー）による「フレーム framework」概念を用いた説明を導入する。この説明は想像的抵抗を「物語の提示するフレームへの抵抗」として解釈することで、先行文献の問題点を解決するが、同時に本稿ではこのアプローチの有効性を示すことで、分析美学のフィクション研究における、「虚構世界 = what to imagine 何を想像するか」だけでなく、「物語参与 = how to imagine どのように想像するか」という視点の重要性を示すことになる。

本稿の構成は以下の通りである。第1節では想像的抵抗の問題が、そもそもどのような問題として提起され分析されたのかについて、問題を提起した Kendall Walton（ウォルトン）や代表的な論者の Tamar Szabó Gendler（ジェンドラー）らの初期の論者たちの議論を追う。第2節では、それら初期の論者の議論を、現象の文脈性を無視していると批判した「第二波」と呼ばれる議論に触れるが、ここでは第二波の議論でも特に重要な、Shen-yi Liao（リャオ）によるジャンルの説明を重点的に検討する。第3節では、それらのアプローチの有効性を認めつつも、問題点があることを指摘し、それを解決する方策として、カリーによるフレーム理論を検討する。

## 1. 「想像的抵抗の問題 The Puzzle of Imaginative Resistance」とは何か —— 初期の論者たちの主張 ——

第1節では、想像的抵抗の問題をウォルトンがどのような問題として提起したのか、またそれに対するウォルトンやジェンドラーらの代表的な分析を紹介する。その上で現象に対する主な二つの立場の間の議論が、実のところ異なる二つの現象をそれぞれ想定していたことを示し、問題を腑分けする。

想像的抵抗の議論の端緒は、ウォルトンが1990年の *Mimesis as Make-Believe* <sup>(2)</sup> でヒュームを引用しつつ述べた現象である。ヒュームは「趣味の基準 Of the Standard of Taste」において、過去の時代の作品の誤りに対して、その誤りの種類によって異なる反応が導かれる旨を述べる。つまり、昔の作品の「理論的誤り」などに対しては寛容な態度で見逃すべきであり、またそれを受け入れるのはさほど困難ではない。しかし一方でそれが道徳的な誤りであったり、自分とは異なる価値判断や感情に関するものである場合は、それを許容すべきではないし、またそれを受け入れるのには極めて熱心な努力が必要であるとヒュームは述べる <sup>(3)</sup>。このような、〈現実とは異なる事柄を受け入れることの難しさ〉の非対称性を、ウォルトンはヒュームから読み取ったのだ。

以上のようなヒュームの記述を、ウォルトンは以下のように定式化することで問題 puzzle を構成する。つまり、フィクションにおける「事実における現実からの逸脱」、例えば「瀉血によって病気が治る」などは、想像的参与に問題がない。それに対して、フィクションにおける「道徳的な逸脱」、例えば「民族虐殺は正当である」などに関しては、想像的参与が相対的に困難であるように思われる。これは何故か、というのが、想像的抵抗 <sup>(4)</sup> の問題である。

ウォルトンは以上のように問題を提起しつつ、1994年の論文 <sup>(5)</sup> で問題の原因を以下のように推論する。つまり想像的抵抗の現象は、非道徳的な「自然的事実」と、それに「付随あるいは依存する性質」との「依存関係」に関係するのではないかと彼は考えるのだ。依存的性質とは例えば、道徳的性質、可笑しさに関する性質や美的性

質など、自然的事実依存する性質である。想像的抵抗はそのような、依存的性質と、非依存的・自然的事実との間の、現実とは異なる依存関係を私たちが想像「出来ない」ために生じるという分析を、ウォルトンは有望視する。彼は以下のような例を挙げる。「赤ん坊を殺したことで、ジゼルダは正しいことをしたのだ。結局のところ、それは女の子だったのだから<sup>(6)</sup>」。私たちは、ジゼルダという人物についての非道徳的＝自然的事実（端的に言えば、性別を理由に嬰兒を殺したこと）が全て与えられたら、それらの事実と道徳的事実に一つの依存関係を認識するだろう。ここで仮に、ジゼルダが「性別を理由に嬰兒を殺した」という事実と、ジゼルダは「間違っただけをした」という道徳的事実が与えられたとすれば、二つ事実の間の依存関係には、問題はない。しかし一方でウォルトンの例のように、ジゼルダがまったく同じ状態で同じ行為を行いながら、ジゼルダが正しいことをした、というような依存関係をフィクションが示すとしたら、私たちはそれを受け入れられず、想像的抵抗が起こるとウォルトンは主張するのである。

一方で、その後の想像的抵抗の議論をリードするジェンドラーは、ウォルトンの分析に異を唱える。彼女は、想像的抵抗が起こるのは、私たちが問題となる事柄を想像することで、そのような「現実世界の見方」を受け入れてしまうことを恐れるためであると主張する。言い換えれば想像的抵抗の原因は、私たちが問題となる命題を（ウォルトンの主張するように）想像「出来ない」ことにあるのではなく、想像「したくない」ことにあると主張したのである<sup>(7)</sup>。

想像的抵抗の議論は、ウォルトンの主張する「不可能説 *cantian*」の論者とジェンドラーの主張する「拒絶説 *wontian*」の論者の対立を軸に展開することになった。想像的抵抗は結局のところ、私たちが想像「出来ない」から起こるのだろうか。それとも「したくない」から起こるのだろうか。私たちの実際のフィクション鑑賞の経験に照らし合わせれば、どちらも正しい、というのが直観であるように思える。つまりフィクション鑑賞における抵抗が、想像「出来ない」から起こることもあれば、想像「したくない」から起こることもあるのではないだろうか。

このような論争の状況において、ウォルトンは他の論者の議論<sup>(8)</sup>を受け、2006年の論文<sup>(9)</sup>で重要な指摘を行う。つまり、不可能説と欲求説の間の議論は、区別さ

れるべき異なる概念を混同していることを指摘したのだ。つまり、議論において〈虚構的真理〉と〈読者に想像されること〉という区別されるべき二つの概念が混同されていたために、結果として〈虚構的真理を受け入れることへの抵抗〉と〈虚構的真理を想像することへの抵抗〉という、異なる現象を混同してしまっていたとウォルトンは述べる。つまり、不可能説が分析対象としているのは「問題となる命題を虚構的真理として受け入れるのが難しいのは何故なのか」という問題である。一方で欲求説が分析対象にしているのは「問題となる命題を虚構的に真であると受け入れた上で、それを想像するのに抵抗を覚えるのは何故なのか」という問題である。これによって、想像的抵抗に関する二つの立場は、異なる問題に対して、異なる説明を行っていた、ということが明らかになった。これ以降、不可能説の重視する問題は「虚構的真理の問題」、欲求説が重視する問題は「想像の問題」と呼ばれることになる。この二つの問題は同時に起こることもあるが、概念的には区別されるものである。

第1節の最後に、「虚構的真理の問題」と「想像の問題」についてまとめる。先ほどの例、「赤ん坊を殺したことで、ジゼルダは正しいことをしたのだ。結局のところ、それは女の子だったのだから」という記述は道徳的に逸脱している。このような文章に、小説を読む中で出くわしたならば、この文章は浮き出（pop out）て、想像的参与に相対的な難しさを感じるだろう。ただその「難しさ」には解釈の余地がある。ここでジゼルダの行為という非道徳的事実と、それに対する道徳的判断との依存関係が想像出来ない場合には、虚構的真理の問題が起こっていると言える、一方で、文章が虚構的に真であると受け入れた上で、それを想像することに抵抗を覚えるなら、そこでは想像の問題が起きていると言える。このように、これら二つの問題は、互いに独立しているが、また一方で同時に起こることもあり得るような問題である。

## 2. 想像的抵抗の議論における文脈の導入

### ——「第二波」の議論——

第2節では、第1節で導入した初期の議論に対して、文脈の考慮が欠けていること

を批判した「第二波」の論者たち、特に Shen-yi Liao (リャオ) の主張を検討する。リャオは現象が文脈依存的であることを指摘した上で、作品のジャンルを考慮することで、文脈を考慮しつつパズルを解決することが出来ると主張した。

第1節の一連の議論を批判した、Bence Nanay<sup>(10)</sup> や Adrianna Clavel-Vazquez<sup>(11)</sup>、リャオらは、想像的抵抗の議論において「第二波」と呼ばれることになる。第二波の論者たちは、初期の議論を、現象の「文脈」を無視しているという点で批判した。つまり初期の論者の脱文脈化した議論では、ある作品では抵抗を引き起こす記述が、他の作品では抵抗を引き起こさないことがあり得る、ということの説明出来ない、またある読者が抵抗を感じる言明に、他の読者が抵抗を感じないことがある、という点を指摘したのだ。

本稿では、第二波の議論でも特に重要なリャオの議論<sup>(12)</sup> を取り上げる。彼は作品の属するジャンルの慣習、及びその慣習が読者に生み出すジャンルの期待によって、抵抗現象を説明出来ると主張した。つまりリャオは、以下のように想像的抵抗を定式化出来ると考えた。「問題となる命題と、『ジャンル慣習』や『ジャンルの期待』が不一致である場合に、想像的抵抗が起こる」。さらに第1節で示した、虚構的真理の問題と、想像の問題はそれぞれ以下のように説明される。つまり虚構的真理の問題は、問題となる命題がジャンル慣習と不協和であるために、それが虚構世界で真であると認めるのが難しいために生じる。一方で想像の問題は、問題となる命題が、ジャンル慣習が読者に生み出すジャンルの期待と不協和であるとき、それを想像するのが困難であるため生じる。

さらにリャオは、以下のような例を用いた心理実験の結果によって、自分の説を立証しようとする。つまり、以下のようにジャンルの異なる文章を並列し、どちらにおいて最後の文に抵抗を覚えるかを尋ねる、というものである。一つ目は次のような、現代のカルト教団のシナリオである。

2010年4月14日、テキサス。そこは真っ暗だった。皆が牧師ウェイン・ハウエルのもとに、告知のために集まった。「全能の神からのお告げが来た。光を取りもどすために、最も若い娘を生贄に捧げなければならない。」彼らは牧師のすべて

## 想像的抵抗の問題について

の言葉を信じた。すべての眼が女の子の赤ん坊を産んだばかりのメアリーに向けられた。メアリーは泣く泣く、赤ん坊を生贄のために牧師に捧げた<sup>(13)</sup>

二つ目は次のような、神話風のシナリオである。

昔々、メキシコのその谷は真っ暗だった。皆は導師シワコワトルの元に、告知のために集まった。「神からのお告げが来た。太陽を蘇らせるために、最も若い娘を生贄に捧げなければならない。」彼らは導師のすべての言葉を信じた。すべての眼が女の子の赤ん坊を産んだばかりのイシエルに向けられた。イシエルは泣く泣く、赤ん坊を生贄のために導師に捧げた<sup>(14)</sup>

両方の後に「メアリー or イシエルは正しいことをしたのだ」という文を見せると、後者より前者において、より多くの抵抗が見受けられたという。これに対してリャオは、リアリズム的ジャンルにおいて道徳的逸脱がジャンル慣習と不協和であるからだ、という説明を与えるのだ。

しかし以上のような第二波のジャンルの説明にも、二つの問題があるように思われる。一つ目は、鑑賞者の物語参与における期待は、ジャンルの期待でない場合もあるのではないか、あるいはジャンルが未形成であるような作品も、私たちは問題なく想像的参与を行うことが出来るのではないかというものである。そのような場合、私たちはジャンルの習慣や期待とは無関係に作品に参加したり、抵抗を覚えたりするだろう。ただし、以上のような問題は「ジャンル」概念の拡張によって解決可能であるかもしれない。しかしより問題となると考えられるのが、二つ目の問題点、つまりリャオの図式によって、本当に「想像の問題」を解決出来ているのかという点である。例えばリャオはリアリズム小説における道徳的逸脱に対する抵抗を、ジャンルの期待との不協和によって説明しようとする。しかし第1節で述べた通り、「想像の問題」とは問題となる命題に対して、読者が想像的参与を「したくない」ことによって起こる抵抗現象である。しかし、単に作中の言明がリアリズムのジャンル慣習から外れていること自体が、想像の「したくなさ」を生むことがあるだろうか。そのような「した

くなさ」は、あくまでリアリズムのジャンル慣習を受け入れた上で（またそれによって虚構的真理を認識した上で）、それが例えば道徳的に逸脱していることに対して向けられるのであって、ジャンル慣習からの逸脱そのものに向けられているのではないだろう。このようにリャオのジャンルの説明は、「虚構的真理の問題」に対しては有効であるものの、「想像の問題」に対しては十分な説明を与えられているとは言い難い。

### 3. 「物語」という観点からの考察

第3節では、以上のような問題点を解決するような想像的抵抗の説明として、グレゴリー・カリーの「フレーム framework」概念による説明を検討する。つまり小説などのフィクション物語作品は、「ストーリー」としての作中の出来事に対して、どのように反応するべきかを誘導する「フレーム」を持つのであり、そのようなフレームに参加することへの抵抗として想像的抵抗を捉え直す、というものである。しかしそれはジャンルの説明と対立するものではなく、むしろ補完し合うことで、抵抗現象の包括的な説明が可能になるものだという事を最後に示したい。

カリーは *Narratives and Narrators* <sup>(15)</sup> において、「物語」の一般理論を構築しようと試みる。この本の中で特に重要なのが、読者のストーリーに対する反応を誘導する、物語の「フレーム」という概念である。この「フレーム」は、物語における「視点」によって与えられ、作中の出来事に対する読者の反応を促すものであるとカリーは述べる。そしてその上でカリーは、そのような物語のフレームへの読者の抵抗こそが、想像的抵抗と呼ばれてきた現象であると主張するのだ。

そのようなカリーの理論の前提となるのが、「ストーリー」と「フレーム」の区別である。物語は表象される一連の出来事としての「ストーリー内容」とは区別される、ストーリー上の出来事に対する「表現された作者の態度」を持つとカリーは述べる。その上でカリーはそのような作者の態度が、物語の「視点」を通じて、「フレーム」の形で示されると言う。この区別は、ストーリーは〈物語において何が起こるのか〉を述べるもので、一方でフレームは、そのような出来事に〈どのように反応する

ように誘導されているのか〉を述べるものであると言ひ換えられる。

以上のような前提を踏まえた上で、カーリーはフレームがどのように働くかについて以下のように述べる。まずカーリーはフレームを「ストーリーに対する、望ましい認知的、価値的、感情的な反応の集合」として定義し、それが首尾よく働くと、「私たちがストーリーに対して適切に参与するよう助けてくれ、『作品のムードや感情的陰影を作り上げる連想のネットワークに気づいたり反応したりする』ことを可能にする」と述べる<sup>(16)</sup>。そのような読者の反応の誘導としてのフレームの原理を、カーリーは心理学における「共同注意 joint attention」の一種の「誘導注意 guided attention」によって基礎づける。誘導注意とは、ある人が何かに注目しているとき、そのことを意識する自分も、そのある人が注目しているものに対する注意に影響を受ける、というものである。物語の読者は、そのような物語のフレームに影響を受けて、ストーリーへの反応を誘導されるというのがカーリーの主張である。

以上のようなフレームによる効果を、文学もまた活用しているとカーリーは主張する。例えばディケンズの『リトル・ドリット』という小説についてカーリーは以下のように述べる。

彼〔ディケンズ〕は白い壁や道を「見つめる」ことや「土地の広がりや荒れた道」そして「こげ茶色の」塵のことを語る。厳しい暑さ、港の水、水膨れのある麦が表象されるのだが、その表象の様態は、容易に記述し得ない、ある種の陰鬱な抑圧を表現するのだ。<sup>(17)</sup>

カーリーによればここで私たちは、登場人物の運命や行為について知る前に、ディケンズの言葉の選び方によってムードを提示されている。ここでディケンズは物語における表象の内容というよりもむしろその「様態 mode」によって、表象内容に対する何かしらのムードを表現しているのだ。そして読者はそれに対して先に述べた「誘導注意」によって、「私たちは語り手のムードを実感する。[...] そして私たちはそのムードを自分たちのものとするのだ。ムードを作るのに、何らかの特定の、感情を惹起するストーリー内の出来事は必要ない<sup>(18)</sup>」というように、物語のムードを自分たちの



ものとするとかリーは述べる。

以上のようなフレームを、標準的な物語参与において読者は、問題なく受け入れることが出来る。しかし物語のフレームの受容を阻害する要因も存在する。例えばカリーは、ディケンズの『骨董屋』においては、作品が読者の情動的反応をあまりにも安易に利用しようとするため、読者の趣味や美的判断による抵抗感と、ディケンズが私たちに望んだような反応が互いに反発し合ってしまうとする<sup>(19)</sup>。そして作品が人種差別的な詩や暴力賛美的な映画の場合は、作品のフレームの作用に比して抵抗が余りに強く、想像的に参与する気になれない・出来ない、ということがあるだろう<sup>(20)</sup>。このようなフレームに対する抵抗こそが、想像的抵抗として論じられてきた現象（の少なくとも一部）であると、カリーは主張する。

ここまでカリーのフレーム理論による抵抗現象の説明について述べたが、これは第2節で検討したようなジャンルの説明と、どのような関係性にあるだろうか。結論から言えば、フレームによる説明は、現象の文脈化という点で、ジャンルの説明は方向性を同じくしており、原則として補完し合う関係にあると言える。第2節の最後に述べたように、「想像の問題」をジャンルの説明は解決しているとは言い難い、つまりジャンル慣習・ジャンルの期待との不協和だけでは「想像したくない」ことの理由が説明出来ていないのに対して、フレームによる説明は、「想像したくない」理由を、作品の提示するフレームに対して、各々の読者が場合によってそれに参与しないこと、とすることで解決を図っていると言える。これは抵抗現象の文脈的な面と、加えて主観的な面、つまりある事柄に対してある人では抵抗を引き起こし、もう一人では抵抗を引き起こさないことがある、という点を上手くとらえた理論だと言える。しかし一方でフレームによる説明は、ジャンルの説明によってうまく解決出来ていた虚構的真理のパズルをうまく説明出来ない。「性別を理由とした嬰兒殺しが善である」という命題において虚構的真理を形成することの難しさは、物語のフレームというより、ストーリー内容の理解に関するもののように思われるし、それをフレームによって解決しようとするれば、ストーリーとフレームの区別というカリーの理論の基盤を揺るがすことになる。それは理論全体を見直す必要に迫られることになり、理論構築のコストが大きすぎるだろう。つまり虚構的真理の問題を、文脈を考慮しつつ説明するには、やは

りジャンルの説明を用いるべきだろう。

## 結び

フィクションにおけるある種の言明が、他の言明よりも相対的に想像が困難である、という想像的抵抗の現象は、初期の議論に見られるようにいくつかの現象がより合わさったものだと言える。特に〈ある種の虚構的真理を認識出来ない〉という「虚構的真理の問題」と、〈ある種の虚構的真理を認識しつつ、それを想像したくない〉という「想像の問題」は、混同されやすいが区別されるべきものである。その上で想像的抵抗の現象を、文脈を考慮しつつ説明するためには、「虚構的真理」の問題をジャンル慣習との不一致によって、「想像の問題」を作品の持つフレームに対する抵抗として説明すべきである。

このように想像的抵抗の問題を、虚構的真理のみを勘案することによっては解決出来ないことは、フィクションに関する問題系において単に「何が表象されているか」、つまり表象対象としての虚構世界だけでなく、「どのように表象されているか」、つまり表象様態を考慮する必要性を示している。本稿の議論によって、後者の表象様態に関しては、「物語」という形式の果たす役割が大きいことを示すことが出来た。このことは言い換えれば、フィクションの「非現実性」という側面に対して、その「拵えものの性<sup>(21)</sup>」や「意図的 - コミュニケーション的人工物<sup>(22)</sup>」という側面に注目するということだと言える。

またそれは同時に、分析美学のフィクション論における「想像力」概念の見直しを迫るものだと言える。つまりそのようなフィクションの理論研究では想像力を、虚構世界において真であるような命題を心に抱く、命題的態度として考えるのが主流だった<sup>(23)</sup>。これは上記の「表象対象」としての虚構世界に対応する想像力と言える。しかし想像的抵抗の議論に見られるように、命題的想像力だけではフィクションの経験の多様な側面を説明出来ない。よってこの点に関しては Richard Moran<sup>(24)</sup> の主張するように、非命題的な「劇的想像力 dramatic imagination」のような概念を措定す

るべきだろう。これは作品の提示するパースペクティヴに入り込む際に用いられる心の働きであり、上記のフィクションの表象様態に対応するものだと言える。以上のようなフィクションにおける表象様態やそれに対応する非命題的想像力の内実が、具体的にどういうものであるかを明らかにすることが、今後の研究の課題となるだろう。

註

- (1) 想像的抵抗の議論の概要や展開については、Liao Shen-yi & Gendler, T. S., “The Problem of Imaginative Resistance” . in Carroll, Noël and Gibson, John. eds., *The Routledge Companion to Philosophy of Literature*, New York: Routledge, 2016, pp. 405-418. や、*Stanford Encyclopedia of Philosophy*, “Imaginative Resistance” に詳しい。 <https://plato.stanford.edu/entries/imaginative-resistance/> (2020年10月26日閲覧)
- (2) Walton, Kendall., *Mimesis as Make-Believe*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1990. (邦訳『フィクションとは何か——ごっこ遊びと芸術——』(田村均訳)名古屋大学出版会、2016)
- (3) ヒューム, D. (田中敏弘訳)「趣味の標準について」『ヒューム 道徳・政治・文学論集 [完訳版]』、名古屋大学出版会、2011、205頁。
- (4) ただし「想像的抵抗 imaginative resistance」という言葉自体を初めて用いたのは、ウォルトンの主張を受けた Moran, Richard., “The Expression of Feeling in Imagination” . *The Philosophical Review*, Vol. 103, No. 1, 1994, pp. 75–106. である。
- (5) Walton, Kendall., “Morals in Fiction and Fictional Morality” . *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volumes*, Vol. 68, 1994, pp. 27–50.
- (6) Ibid., p. 37.
- (7) ジェンドラーの主な主張は Gendler, T. S., “The Puzzle of Imaginative Resistance” . *The Journal of Philosophy*, Vol. 97, No. 2, 2000, pp. 55–81. を参照。
- (8) 主に Weatherson, Brian., “Morality, Fiction, and Possibility” . *Philosophers’ Imprint*, Vol. 4, No. 3, 2004, pp. 1–27.
- (9) Walton, Kendall., “On the (So-called) Puzzle of Imaginative Resistance” . in Nichols, Shaun. ed., *The Architecture of the Imagination: New Essays on Pretense, Possibility, and Fiction*, New York: Oxford University Press, 2006, pp. 137–148.
- (10) Nanay, Bence., “Imaginative Resistance and Conversational Implicatures” . *The Philosophical Quarterly*, Vol. 60, No. 240, 2010, pp. 586–600.

想像的抵抗の問題について

(11) Clavel-Vazquez, Adriana., “Sugar and Spice, and Everything Nice: What Rough Heroines Tell Us about Imaginative Resistance”. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol. 76, No. 2, 2018, pp. 201–212.

(12) Liao, Shen-yi., “Imaginative Resistance, Narrative Engagement, Genre”. *Res Philosophica*, Vol. 93, No. 2, 2016, pp. 461–482. リャオのこの論文は、第二波の議論の多くが論じるジャンルとしての文脈の現象における役割について、最も基礎的なレベルから包括的に分析したものであり、註(11)のClavel-Vazquez(2018)などはこの論文に直接依拠している。

(13) *Ibid.*, p. 467.

(14) *Ibid.*, p. 467.

(15) Currie, Gregory., *Narratives and Narrators – A Philosophy of Stories*, Oxford: Oxford University Press, 2010.

(16) *Ibid.*, p. 86.

(17) *Ibid.*, p. 99.

(18) *Ibid.*, p. 99.

(19) *Ibid.*, p. 109.

(20) *Ibid.*, pp. 109–110.

(21) カリーは註(15)のCurrie(2010)の冒頭において、「物語」を大まかに「作り手のコミュニケーション的意図を露わにすることによって動く、意図的に作られた表象の仕掛けもの」と定義する。

(22) 森功次「ウォルトンのフィクション論における情動の問題——Walton, Fiction, Emotion——」、『美学芸術学研究』、No. 29、2010、43–83頁。森は西村清和『フィクションの美学』（勁草書房、1993年）を引きつつ、フィクションの「現実には存在しないもの」としての側面だけでなく、作者によって何らかの反応を期待されて提示される「拵えもの」としての側面に着目すべきだと述べる。

(23) 分析美学のフィクション論をけん引したケンダル・ウォルトンもこの立場を採る。

(24) 註(4)のMoran(1994)においてモランは既に、ウォルトンの主張する命題的想像力ではフィクションにおける情動を説明出来ないと論じている。